2020年度　入学試験　国語　問題冊子

早稲田大学系属　早稲田渋谷シンガポール校

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、下記の注意事項をよく読んでください。

注 意 事 項

１．問題は、本冊子のｐ．１～ｐ．２６となります。
２．解答は、別紙の解答用紙に記入してください。
３．「始め」の合図があるまで、問題冊子、解答用紙を開かないでください。
４．監督者が「始め」の合図をしてから、問題冊子と解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
５．解答中に何か用事がある場合は、黙って手をあげてください。
６．解答中に問題冊子や解答用紙の汚れ、印刷の不鮮明な箇所に気付いた場合は、黙って手をあげ監督者に申し出てください。
７．「止め」の合図で筆記用具を置き、監督者の指示に従って解答用紙の回収を待ってください。
８.問題冊子も回収します。持ち帰らないでください。

※　解答上の注意
文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさで・濃く）記しなさい。
字画（漢字を構成する点や線）が認められない場合には、不正解または減点の対象になります。

受験番号							氏名

2020　I

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「責任を取る」とはどういうことか。これは僕にとってはストライクゾーンど真ん中の質問です。というのも、「責任論」というのは、僕のa シショウであるところのエマニュエル・レヴィナス先生の哲学の最大の主題であったからであります。ということはつまり、僕はレヴィナス先生に「弟子入り」宣言をなした１９８７年から四半世紀にわたり「責任」について考え続けてきたということになります。

ですから、問いに対する僕の答えはシンプルです。でも、その理由を語るためにはいささか長い紙数が必要になります。

問いはこうでした。「責任を取るということは可能でしょうか？」

人を傷つけたり、人が大切にしているものを損なったりした場合、それを1「復元する」ということは原理的に不可能です。仮にすばらしく医学が発達していて、多少の怪我なら死者でも蘇生（そせい）させることができる世界があったとします。そこで、誰かがあなたを殺しました。でも、すぐに病院に運び込んだら、失血死した死者を医者がさくさくと縫い合わせて、傷跡をきれいにして、どんと心臓に電気ショックを送ったら、あなたは無事に蘇生しました。病院に運んだりする手間はぜんぶ殺人者が整えてくれました。もちろん、医療に要した費用も彼が払いました。

さて、この場合、「いったん殺したけれど、きれいに元通りにしたから、これでチャラね」と殺人者が言ったとして、あなたはそれを許せますか？

もし、責任を取るというのが、「損なわれたものを原状に復す」ということを意味するなら、この殺人者はたしかに責任を取ったことになる。

でも、「冗談じゃない」とみなさんは思うでしょう？

殺されたときの不快感と絶望感は、傷跡が生理学的にどれほどきれいに縫い合わされたからと言って、それで消えるものじ

やない。その経験は、人間の深いところにある何かピュアで無垢(むく)なものを、取り返しのつかないしかたで壊してしまった。そこで失われたものはどんな手立てを尽くしてももう復元できません。

別にそこまで極端な例を挙げなくても、ふだんの生活でも、復元というのは不可能だということはわかりますね。

あなたがb ハイグウ者とか恋人に向かって、「あなたのその性根のc 卑しいところが私は我慢できないの」とか、「おまえさ、飯食うときに育ちの悪さが出っからよ、人前でいっしょに飯食うのやなんだよ、オレ」とか、そういうめちゃくちゃひどいことを言ったとします。でも、言ったあとに「これはあまりにひどいことを申し上げた」と深く反省して、「さっきのなしね。ごめんね。つい、心にもないことを言ってしまって……」と言い訳しても、もう遅いですよね。もう、おしまいです。復元不能。

世の中には、「ごめん」で済む話もあれば、「ごめん」で済まない話もある。そして、たいていの話は（満員電車の中で足を踏んじゃったとかいう、ほんとうにささいな事例以外は）「ごめんじゃ済まない」話なんです。足を踏まれたくらいでさえ、「てめ、このやろう」と逆上して、刺しちゃう奴とかいるくらいですから。

「ごめんで済む話」はこの世にない、と。そう思っていたほうが無難だと思います。

「ごめん」で済む話はない。どのような損害であれ、それを原状に復元して、「なかったこと」にすることはできない。そういうことです。ですから、「もう起きてしまったこと」について「責任を取る」ということはできません。原理的にできないのです。もう起きちゃったんだから。

だから、人が不始末を犯したときに、「おい、どうすんだよ。責任取れよ」と凄(すご)んでいる人がいますけれど、あれは「私がこうむった損害について、あなたが原状回復をなすならば、すべては『なかったこと』にしてあげよう」と言っているわけじゃないんです。「どうすんだよ、おまえ、こんなことしやがって。どうやって責任取るんだよ。でも、おまえがどのようなかたちで責任を取ったつもりになろうとしても、オレは『それでは責任を取ったことにはならない』と言うからね」と言ってい

るんです。

だからこそ、「眼には眼を、歯には歯を」という古代の法典が作られたのです。

これは「同罪刑法」と呼ばれるルールですが、別にこれは未開人が考え出した[2]残虐な法律というわけではありません。逆です。

どこかで無限責任を停止させなければならないので、法律で「これ以上は責任を遡及(そきゅう)してはならない」という限度を定めたのです。

人に眼を抉(えぐ)られた人間には、相手の眼を抉る権利があるということを言っているのではありません。逆です。「人に眼を抉られた人間は、相手の眼を抉る以上の報復をなしてはならない」と、復讐の権利の行使を抑制しているのです。

実際には、眼を抉られた人の視力は、加害者の眼を抉ったことで回復するわけではありません。眼は見えないままだし、痛みは消えないし、容貌だってずいぶん損なわれてしまった。でも、そういう損害は、相手の眼を抉っても、何ひとつ回復されない。

だから、「責任を取る」とは「原状に回復すること」であるというルールに基づけば、「眼には眼を」というのは、全然「原状回復」じゃない。だから、責任を取ったことにはならないのです。

同罪刑法が教えているのは、どのようなことであれ、一度起きてしまったことを原状に復することはできないということです。人間は自分がひとたび犯した罪について、これを十分に償うということが決してできない。

同罪刑法は「責任を取ることの不可能性」を教えているのです。人間が人間に加えた傷は、どのような対抗的暴力を以ても、どのような賠償の財貨を以ても、癒やすことができない。「その傷跡からは永遠に血が流れ続ける」とレヴィナス先生は『困難な自由』に書いています。

まことに[3]逆説的なことですが、私たちが「責任」という言葉を口にするのは、「責任を取る」ことを求められるような事態に決して陥ってはならないという予防的な文脈においてだということです。それ以外に「責任」という言葉の生産的な使用

法はありません。

さっき言ったように「責任取れよな」という言葉は、「おまえには永遠に責任を取ることができない」という呪いの言葉です。「これこれの償いをなしたら許されるであろう」と言っているわけではありません。

学校でいじめにあった子どもが自殺したときに、親がいじめた子どもの両親と学校長と担任を相手取って、「1億円の損害賠償請求」をしたというような記事を読むことがあります。これだって「1億円払ったら許してやる」と言っているわけではありません。この賠償額の設定基準は「相手の一生を台無しにできるくらいの金額」ということです。つまり、賠償請求をすることを通じて、「私はおまえたちを絶対に許さない」という賠償の不可能性を告げているのです。

「責任を取れ」というセンテンスは、「なぜなら、おまえには責任を取ることができないからだ」という口にされないセンテンスを常に伴っているのです。

ですから、「どうやって責任を取るのか」というのは問いのありようとして、すでに間違っているのです。

責任は取れないんですから。誰にも。

4 私たちが責任について思考できることは、ひとつだけです。

どうすれば「責任を取る」ことを求められるような立場に立たないか、ということ、それだけです。

d カンチガいしてもらっては困りますが、それは何についても「私は知らない。私は関与していない。私には責任がない」という言い訳を用意して、逃げ出すということではありません。まるで、逆です。

だって、その人は「私には責任がない」と言い張っているわけですからね。いかなる不祥事が起きようと、他人が傷つこうと、貴重な富が失われようと、システムが瓦解しようと、「私には責任がない」と言って逃げ出すんです。そんなことを金切り声で言い立てる人間ばかりだったら、世の中、どうなりますか。「私には責任がない」と言う権利を留保している人間だけで構成された社会を想像してください。そりゃすごいですよ。電気は消える。水道は止まる。電車は来ない。銀行のＡＴＭは動かない。電話は通じない。その他もろもろ。

きちんと機能している社会、安全で、そこそこ豊かで、みんながルールをだいたい守っている社会に住みながら、かつ「責任を取ることを人から求められないで済む」生き方をしようと思ったら、やることはひとつしかありません。

それは「オレが責任を持つよ」という言葉を言うことです。

考えればすぐにわかります。構成員全員が「オレには責任ないからね」と言い募り、不祥事の責任を誰か他人に押しつけようと汲々（きゅうきゅう）としている社会と、構成員全員が自分の手の届く範囲のことについては、「あ、それはオレが責任を持つよ」とさらっと言ってくれる社会で、どちらが「誰かが責任を取らなければならないようなひどいこと」が起こる確率が高いか。

まことに逆説的なことではありますが、「オレが責任を取るよ」という言葉を言う人間がひとり増えるごとに、その集団からは「誰かが責任を取らなければならないようなこと」が起きるリスクがひとつずつ減っていくのです。集団構成員の全員が人を差し置いてまで「オレが責任を取るよ」と言う社会では、「誰かが責任を取らなければならないような事故やミス」が起きても、「誰の責任だ」と言うような議論は誰もしません。そんな話題には誰も時間をeサかない。だって、みんなその「ひどいこと」について、自分にも責任の一端があったと感じるに決まっているからです。「この事態については、オレにも責任の一端はあるよな」と思って、内心忸怩（じくじ）たる人間がどうして「責任者出てこい」というような他罰的な言葉をぺらぺら口に出すことができるでしょうか。

長くなりましたので、結論を申し上げます。

責任というのは、誰にも取ることのできないものです。にもかかわらず、責任というのは、人に押しつけられるものではありません。自分で引き受けるものです。というのは、「責任を引き受けます」と宣言する人間が多ければ多いほど、「誰かが責任を引き受けなければならないようなこと」の出現確率は逓減（ていげん）してゆくからです。

どのような社会的な概念も、人間が幸福に、豊かに、安全に生き延びるために考案されたものです。「責任」という概念もそのひとつです。

「責任」は、「鍋」とか「目覚まし時計」のように、実体的に存在するものではありません。でも、それが「ある」という

ふうに考えたほうがいいと昔の人は考えた。それをどういうふうに扱うのかについて、エンドレスに困惑することを通じて、人間が倫理的に成熟してゆくことを可能にする、遂行的な概念だからこそ、作り出されたのです。

（内田樹『困難な成熟』より）

問一　傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に、漢字を平仮名に改めなさい。その際、次の【条件】にしたがうこと。

【条件】　文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさで・濃く）記すこと。

問二　傍線部１「『復元する』ということは原理的に不可能です」とあるが、そのように言えるのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　死んでしまった人間を縫い合わせたり、電気ショックを送ったりして生き返らせることは、技術的な面においてほぼ出来ないから。

イ　破壊されたものの各部分を新しいものに交換して元通りにすることは、物質の構成要素が異なるため根本的な原状回復とは認められないから。

ウ　自分の口から出た言葉を取り消してなかったことにすることは、自分と相手との間に深い理解がない限り実質的には難しいから。

エ　一度生じてしまった事態を何から何まで完璧に元の状態に戻すことは、物理的に可能であったとしても、本質の部分では成しえないから。

オ　起きてしまったことを何事もなかったような状態にすることは、周りの人々からの許しを得たとしても、原理的に許されないから。

問三　傍線部2「残虐な法律というわけではありません」とあるが、「同罪刑法」が「残虐な法律」ではないと言えるのはなぜか、四十五字以内（句読点等の記号も字数に含む。）で説明しなさい。

〈下書き用〉

問四　傍線部３「逆説的なこと」とあるが、どのような点が「逆説的」だと言うのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「責任」とは、引き受けなければいけない義務という意味の言葉であるのに、実際にその言葉が用いられる時には、そのような義務を負う立場に陥らないことが目指されている点。

イ　「責任」とは、結果についての責めを自ら負うという意味の言葉であるのに、実際にその言葉が用いられる時には、責められることを他人に押しつけようとしてしまう点。

ウ　「責任」とは、原理的に実行不可能であることを暗示する言葉であるのに、実際にその言葉が用いられる時には、実行不可能であることが忘れられてしまう点。

エ　「責任」とは、実体的に存在しないものを表す言葉であるのに、実際にその言葉が用いられる時には、社会全体としてそれを「ある」ものとして捉え、構成員の倫理的な成熟が目指されている点。

オ　「責任」とは、償うことによって許しを得るための言葉であるのに、実際にその言葉が用いられる時には、決して許しを得ることはできないということが暗黙の了解となっている点。

問五　傍線部４「私たちが責任について思考できること」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　万が一問題が生じた場合を想定して責任の取り方について考えるのではなく、集団の構成員全員が自分にも責任の一端があると考えること。

イ　原理的に不可能な「原状回復」の手段を考えるのではなく、責任の所在を分散させて個人にかかる負担を極力小さくする方法を考えること。

ウ　「同罪刑法」によって無限責任を回避する事を考えるのではなく、責任を取らなくても許される程度の地位に甘んじるべきだと考えること。

エ　責任を取らざるを得ない事態を未然に防ごうと考えるのではなく、問題が発生した際に潔く全責任を責任者一人で背負えばよいと考えること。

オ　集団の構成員が責任を引き受けることを考えるのではなく、誰かが責任を取らなくてはならない状況を出来る限りなくすことができるよう考えること。

問六　波線部「責任を取るということは可能でしょうか？」とあるが、筆者は「人間と責任」についてどのような考えを持っているか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　様々な事象が起きる中で、個人が「責任を取る」ことを求められることがあるが、大きな責任を個人が背負うことなどできないのは明白な事実なので、誰もが自らにも責任の一端はあると常に心に留め、組織として責任を背負っていく姿勢こそが、より良い人間社会を築くのである。

イ　あらゆる事象において、人間が「責任を取る」ことには限界があるものの、責任という概念は本人の思考の中にのみ存在し、実体としては存在しないものなので、他人に押しつけることはできず、無理を承知で本人が引き受ける行為の連鎖だけが、豊かな人間社会を作るのである。

ウ　全ての事象に関して、個人が「責任を取る」ことは事実上不可能であるが、倫理的な存在たる人間である以上、何らかの失敗を犯した場合は責任を背負う覚悟を示すことが社会においては強く求められるので、人間が安全に生き延びるためには不可欠な概念だと言えるのである。

エ　いかなる事象においても、人間の「責任を取る」という言葉ほど無力なものはないが、人間が最も幸福かつ安全に暮らせるのは責任を他人に押しつけない社会であるため、たとえ自分が責任を負うのは不可能だと認識していても、その意志を口にすることには大きな価値があるのである。

オ　どのような事象であれ、人間には「責任を取る」ことなどできないが、自ら責任を引き受けようとする人々の姿勢こそが不祥事や失態を抑制するものなので、責任という概念について明白にすることは困難でも、人間社会をより進歩させるためには不断に考え続けていくべきである。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（大学生の依田（よだ）は、ある未亡人の家に下宿していた。しかし、未亡人の姪の久子が同居することになったため、依田は未亡人から転居を求められ、移転先が見つかるまでの間は、部屋を久子に譲り、依田は二階の空き部屋に移った。移転先がなかなか見つからない中、依田は一週間に一度か二度、久子に代数と英語を教える日々が続いていた。）

久子は代数の方も十八番と二十一番と二十二番がわからないといい出した。

「こんなものなんでもないじゃありませんか。」

依田は少しいらいらしていった。実際やさしくもあったが、それよりもそれ以上そこに坐らされているのが辛くなって来た。一題ぐらいで逃げ出すつもりで十八番から説明しかけたところへ、未亡人の声で久子を呼んだ。久子は立って行った。依田は説明を中止した。離室へなにか取りにやらされた様子でちょっと帰って来なかった。a じれた依田は、待っている間に一人でやってしまおうと思い、手を伸ばして、久子がひろげたままにしてある雑記帳を取ろうとすると、紙がめくれて同じ代数のきれいに運算したページが現われた。――久子が依田に見てもらう時の帳面は厚いノートで、代数も英語も区別がなかった。――驚いたことには、出来ないはずの十八番の問題が、そこでは立派に解いてあり、なお調べて行くと他の二十一番も二番も同じく出来て、完全な式と解答を並べてあった。一体これはどうしたのだ。――不快な疑惑の底から、むらむらとした怒りが湧きたった。依田はすべてを久子の意地の悪い悪戯にした。彼の忙しいのを知って、わざと無駄な労力を費させて、面白がってからかっているのだと思った。さっき英作文を直している間の、b しらじらしい、無感動な顔つきが小憎く思い浮かべられた。あの作文のひどい間違いだって、今では故意にしたとしか考えられなくなった。同時に英作文にも同じ悪企みが潜んでいそうな気がしたので、熱心にくって見た。もし発見したらその二つの場所をテーブルの上にひろげておいて、黙って二階へ帰ってしまおうと思った。ちょっと見つからなかった。先に行くと帳面はだんだん乱雑になり、手紙の下書きがあるかと思うと、英語の単語が書きとってあり、同じ詩らしいものの抜萃（ばっすい）にまじって、数字が滅茶苦茶に護符のように書き並べてある。そ

の解釈と見える分らない文句が書き散らしてある。ある場所には学校友だちの似顔らしい女学生風の頭部が三つ並んで描かれ、めいめいの頭に一羽ずつ小鳥がとまっている。たぶんこの三人が、級の代表的おしゃべりなのだと思うと、我ともなくほほ笑まれた。これらのいたずらがきは、率直で、無邪気で、平生の久子の素っ気ない態度から受け取るものとは、別人のような可愛らしい親しみを依田に抱かせた。1 彼は最初の怒りをもう持ちつづけることはできなくなった。何の目的でこの帳面を覗きかけたかさえ忘れ、ぼんやりとした楽しさと、同時に新たにあらわれた悪気のない好奇心でページを翻しているうちに、ふと或るページのものが彼の視線を引きつけた。

それは花と唐草風の葉で丹念にピラミッド形を編みあげたもので、ちょっと見てはただそれだけの、幼稚なデザインに過ぎなかった。が、注意すると単に花と唐草ばかりではなく、中央にアルファベットでなにか書いてあった。唐草の葉や蔓や花弁に紛れるように巧妙に模様化されてあったにもかかわらず、依田はその四つの自分に最も親しい文字を見遁(みのが)しはしなかった。と、心臓の血が一時に沸騰して身体じゅうに逆(ほとばし)った。彼はまっ赤になり、震え、きらきらする眼で、雑記帳を掴んで、電燈の球にくっつけた。その飾り枠に飾られた幸福な文字が、自分の名前に相違ないか、もう一度はっきり確かめたかった。

丁度その時久子が部屋に帰って来た。彼女は彼の持っているものを一目見るとともに、その顔に極度の狼狽をあらわし、おそろしい勢いで手に飛びかかった。いつもの依田であったならば、この権幕にびっくらし、盗み見の罪を恥じながら逃げ出したであろう。しかし彼女の秘密を知ったことが、彼を勝利者の気持にした。平生のおちつきを失い、泣きそうにあせっている相手の様子も、気味よくおもしろかった。で、依田は素早く身を替わすと立ち上がり、2 雑記帳を握った手を出来るだけ高く上に突き上げた。久子は縋(すが)り、伸びあがってなお奪おうとした。二人は争った。しかもどちらも隣の部屋を忘れなかったので、一言も声を立てなかった。終にどうしても取り戻せないのが分かった時、久子は手を離し、口惜しそうな怒った顔で彼を睨(にら)んだまま突っ立った。なにかいいたいように唇を動かした。が、3 なんにもいえないじれったさ、忌々しさ、すべての不自然な圧(お)しゆがめられた感情が、不意に彼女を夢中にした。久子は子猫のようにもう一度飛びかかって来たと思うと、いきなり雑記帳をつかんだ依田の右の手首に噛みついた。

それから十日あまりの間、依田はほかのことはなんにも考えなかった。その一夜は、彼にとって夢のような楽しさであったとともに、へんに気懸りな謎であった。あの不都合な代数の奸策とあれほど丹念に飾り慈しまれていた自分の名前の間に何の関係があったか。また久子が自分をひそかに愛していたとするならば、何故いつもあんな失敬な態度を示したか。解くことが出来なかった。――いや、仮に愛していたとしても、もうおしまいになったのだと彼は考えた。あの晩雑記帳の秘密を発(あば)かれたことが、彼女をすっかり怒らしてしまったのだ。実際久子は、その後は決して依田に教わろうとはしなかった。のみならず露骨に避けた。どうしても顔を合わせなければならなかった場合は、前の無関心なつんとした様子の代りに、明かに敵意のこもった態度で、丁度怒って噛みついたあの時と同じ眼つきで、彼を見た。依田はその度に惑い、悩んだ。もし彼女の腹立ちがなにかで解けるなら、どんなことでもしたであろう。彼はせめてその気持だけでも通じたかったが、機会がなかった。手紙を書く。そんなことは当時の依田には考えられもしないことであった。どうかすると、ピラミッドの中の名前を自分のだと思ったのは恐ろしい妄想で、あわてて見誤ったのだという気がした。誰か似寄ったほかの名前であるに相違なかった。でなければ久子がいつまでも真剣に怒っているはずはない。――この考え方は絶望的であったが、4 矛盾がないだけ彼の心を悲しく整え、諦めに導く便りになった。ことに母方の大学生との縁組の話が嘘でなかったら、もちろん未亡人がそんな嘘を吐くはずはないから、久子は半分夫のきまった女だ。それを知ってなお積極的に感情を働かせることは、罪でないまでも、それに近い無節制な行為である。それともどんな罪を犯し、どんな無茶をしても久子を得なければならないほど自分は彼女を恋しているのだろうか。その獲得に伴って生ずべき一切の険しい責任、他の運命に喰い入ったものが、当然身に負うべき刺(とげ)を悔いなく受けうるだろうか。――そこまで考えて彼は自分が恥かしくなった。こんなことを考えているのを久子が聞いたら、大きなお世話だと怒るだろう。誰をあてにそんな恋人ぶった真似をしていると嘲笑するだろう。依田は怒られることには我慢出来ても、嘲笑には堪えられない男であった。彼はもう余計なことは考えまいと決心した。この一、二ヶ月、もっとも愚かな役目を演じている気がした。そうして頭を悪くし、勉強を怠り、女々しい厭な人間になったと思った。彼は以前の快活と平静が取り戻したかった。学校もあと一年きりだ。することは山ほどある。この際すべての迷妄から脱し、落ち着いて眠り、朗らかな気持で秩

序正しい勉強生活に返ることは、なにより必要であった。しかし、夏休まで引っ越すほどの間もなかったので、彼はすぐ国に帰ろうと決心した。未亡人にもその旨を伝えた。未亡人は相変らず慇懃(いんぎん)に、またたしかに安心したらしい様子で彼の通知を受け取ると、机や本箱は九月まで預かろうといった。依田はそれも断った方がいいのだと知っていたが、かすかな未練が決心を挫(くじ)いた。それでも、いつ運びだしても出されるように片づけ、空いた押入に仕舞い込んだので、いよいよ明日の朝立つとなった夕方には、八畳の二階は鞄としばった行李(こうり)がころがっているだけの、がらんとした空き部屋になった。

（荷物が整理された自分の部屋で、依田は久子のことを考えているうちに、以前は依田が使用し、現在は久子の部屋となっている部屋を見てみたいという気持ちを抑えきれなくなった。そこで、未亡人や久子が女中を連れて買物に行っている隙に久子の部屋をのぞこうと二階の自分の部屋を出て、階段の踊り場の電燈のスイッチを入れた。）

その時であった。表のくぐりのベルがけたたましく鳴り、誰か半分走っているような足音で前庭の長い敷石を駈けて来たのは。――玄関の戸が開いた。はじめベルを聞いた時には未亡人が帰ったのだと思い、依田はあわててつけたばかりの階段の電燈を消した。時機を失した残念さよりも、救われたようなこころ安さを感じた。しかし足音と玄関の開け方で、帰ったのは久子ひとりだとわかった。なぜまたひとり先に帰ったのだろう。――この疑いはすぐその後から激しい驚愕に変じた。久子は玄関から離室の方へ行く代りに階段を上って来るらしかった。帰った時の気忙しげな様子とは打って変った注意深いしずかな足どりで、灯もつけないで上って来る。留守をしてもらった挨拶のためか。平生の彼女から考えて、そうだとは信じられなかった。では何の用事があるのだろう。あれほど露骨な敵意を示している自分の部屋へ、しかも今まで決して来たこともない久子が来ようとしている。――うたがいと驚きと、漠然とした期待で、うす暗い階段のほうを見詰め、棒のように突っ立った依田の眼の前に、久子の白い浴衣をきた姿が、頭部から肩、肩から胸へと順々にあらわれた。久子は俯向いていた。しかし階段を上りきると、顔をあげ、依田の方へしずかな一瞥(いちべつ)を投げてから、そのままっすぐに進んで来た。二人は部屋のまん中に三尺

と離れないで向き合った。

「5　九月にはもう帰っていらっしゃらないの。」

押さえつけた低いかすれ声で久子は口をきった。その調子が依田のおどろきを二倍にした。彼は大きく瞬きをし、自分の前に立っているのがほんとうに久子であるか信じきれないように、相手を眺めた。左から受けた電燈のせいで、半面が青白く、半面が濃い陰になった久子の顔は、優しい言葉つきとは反対に硬ばって震え、一つの強い、これまで見たことのない感情で燃え上っていた。あの雑記帳の中の名前が、ほかの人の名前でなかったのを依田ははじめて信じた。

「奥さんが何かいいましたか。」

彼は夢中で口を動かした。

「いいえ、なんにも。」

「じゃ、どうしてそんなこというのです。」

「わたしがあんまりやんちゃをしたから、怒っていらっしゃらないかとおもって。」

「馬鹿なこと。」

そういった時、実際不思議にも三ヵ月間依田を悩ましつづけた苦痛や不快や寂寥が、痕跡もとめないほど綺麗に彼のこころから去っていった。

「じゃ、いらっしゃるのね。」

「来ますとも。」

彼は誓うようにいった。久子の愛をたしかめた悦び、久子に待たれているというおもい、このつぎに逢う時は今までと別な久子に迎えられるのだと思う楽しい想像が、その嘘をもっとも自然に吐かせた。

（野上弥生子「茶料理」より）

問一　傍線部a・bの本文中の意味として最も適当なものを、次の語群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a　じれた

ア　不安に思った
イ　腹立たしく思った
ウ　良い機会だと思った
エ　拍子抜けだと思った
オ　もどかしく思った

b　しらじらしい

ア　落ち着きのない
イ　しらばくれている
ウ　いらだたしい
エ　他人行儀である
オ　やましさがない

問二　傍線部１「彼は最初の怒りをもう持ちつづけることはできなくなった」とあるが、なぜか、八十字以内（句読点等の記号も字数に含む。）で説明しなさい。ただし、「怒り」の内容も含めて説明すること。

〈下書き用〉

問三　傍線部2「雑記帳を握った手を出来るだけ高く上に突き上げた」とあるが、この時の依田についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　久子のノートの中に自分の名前を見つけたことで、自分に対する恋愛感情を実感して満たされた思いを、少しでも長く味わうために、決してノートは返すまいと必死になっている。

イ　久子のノートの落書きの中に紛れていた文字が、本当に自分の名前のアルファベットだったのか不安になり、改めて確認するためにノートを電燈に近づけて文字を凝視している。

ウ　日頃から久子の無愛想な態度に対して苛立っていたため、今こそ仕返しをして気持ちを晴らす絶好の機会だと考え、秘密を握られた久子の狼狽ぶりに大きな満足感を抱いている。

エ　何気なくめくっていた久子のノートの中に、落書きに紛らせて自分の名前を記していたのを見つけたことで気持ちが舞い上がり、久子の慌てぶりによって優越感がくすぐられている。

オ　久子への思いは自分の片思いだと信じ込んでいたが、自分の名前がノートにこっそりと書き記されていたことに抑えきれない喜びを感じ、隠そうとしても隠しきれないでいる。

問四　傍線部3「なんにもいえないじれったさ、忌々しさ、すべての不自然な圧しゆがめられた感情が、不意に彼女を夢中にした」とあるが、この時の久子についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　好意を抱いていた依田に秘密を知られた恥ずかしさ、雑記帳を覗き見られたことへの怒り、雑記帳を取り返すことが出来ない苛立ちなどの葛藤の中、声を立てるのを抑えなければいけないという状況に我を失っている。

イ　自分の秘密を知られた焦り、好意を寄せている依田にからかわれた怒り、雑記帳を取られた悔しさなどを感じながらも、意地悪な依田を憎みきれない自分の深い愛情と精神的な甘さに対して苛立って冷静さをなくしている。

ウ　依田をからかっていたことが露見した気まずさ、どうしても雑記帳を返してもらえないことへの怒り、依田に対する淡い恋心などを抱えつつ、未亡人に知られるわけにはいかないと苦悩し、どうしてよいか分からなくなっている。

エ　自分のささやかな秘密を暴露された怒り、どうしても依田には敵わないというあきらめ、好意を寄せていた相手に嫌われた悲しみなどを訴えたいと思っているが、婚約者がいるという立場を考えてたかぶる想いを抑えきれないでいる。

オ　許されぬ恋心を明かせない苛立ち、雑記帳の秘密が知られてしまったことへの腹立たしさ、親が決めた婚約を守らなければならないという義務感などによって、自分の希望がかなうことはないのだと自暴自棄になっている。

問五　傍線部４「矛盾がないだけ彼の心を悲しく整え、諦めに導く便りになった」とあるが、この時の依田についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　久子の雑記帳に自分の名前が記されていたのを見たことで、久子の自分への愛情を確信し夢のような気持ちでいたが、勝手に雑記帳を見られたことで怒りをあらわにする久子を見るうちに、久子に謝るべきかどうか焦りはじめている。

イ　久子の雑記帳に自分の名前が記されていたと思い大きな喜びを感じていたが、それ以降の久子の不可解な態度に悩み苦しみ、雑記帳の名前は見間違えだったと思うことで、自分の気持ちに折り合いをつけようとしている。

ウ　久子が雑記帳に自分の名前を記した意図をあれこれ考えるうちに日が経ってしまった上に、久子が自分と距離をおいた態度で接するようになったことで、久子の本心を知るためにどうやって声をかけようかと思い悩んでいる。

エ　久子が雑記帳に記した自分の名前を見たことで久子の自分への好意を知ることができた一方で、日頃の失敬な態度と矛盾しており整合性がつかずにいたが、久子を怒らせてしまった以上、考えても仕方がないと諦めている。

オ　久子の雑記帳に自分の名前が記されていたのを見たことで久子がひそかに自分を愛していることに気付き、それ以来露骨に自分を避ける久子の態度を初々しく思いつつ、どうやって改めさせてやろうかと思いをめぐらせている。

問六　傍線部5「九月にはもう帰っていらっしゃらないの」とあるが、この時の久子についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　依田に対して気のある素振りをしたり、ノートに名前を落書きしたりしたことで、自分に好意を持っているのではないかと依田を誤解させてしまい、ぎくしゃくした関係が続いていたことを申し訳なく感じて、久しぶりに依田に会える機会に関係性を修復しようと、意を決して声をかけている。

イ　代数や英語に関する質問が、実は依田に近づきたいがための偽りであったことが明らかになり、その事実を知られた気まずさから逆に距離ができてしまったものの、依然として抱き続ける依田への強い想いともう会えないかも知れないという不安をその丁寧な話し方の内に抱え込んでいる。

ウ　本心では勉強を素直に教えてもらうことを望んでいたにも関わらず、恥ずかしさ故に依田に対して失礼な態度をとり続けたことで、怒らせて引越しまでさせてしまったが、今後も一緒に住んで勉強を教えてもらいたいという気持ちから、依田の機嫌をとるために普段よりかしこまった言葉を投げかけて、様子をうかがっている。

エ　依田への秘めた恋心を本人に知られた恥ずかしさから、依田に対してとげとげしい態度をとるようになっていたことに加えて、母方の大学生との縁組が決まっているという事実を隠していたことが知られてしまったことで、依田に嫌われてしまったが、どうしても依田への気持ちを断ち切ることができず、また帰ってきてほしいと切望している。

オ　週に一、二度依田から勉強を教えてもらっているうちに、二人の距離が縮まってお互いを意識するようになっていたが、久子の縁組が既に決まっていることを依田が知ってからは疎遠になっていたので、縁組について正直に話すことが出来なかったことを後悔し、ばつが悪いと感じている。

問題は次の頁に続きます。

三　次の文章は、九州にある大宰府での任期を終えた藤原佐理（すけまさ）が、船で帰京する時の話である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

（注1）佐理の大弐（だいに）、世の手書（てかき）の上手。任はてて上られけるに、伊予国のまへなる（注2）泊（と）まりにて、日いみじう荒れ、海のおもて悪しくて、風おそろしく吹きなどするを、少しなほりて出でむとしたまへば、また同じやうになりぬ。かくのみしつつ日頃過ぎれば、1 いとあやしく思して、（注3）もの問ひたまへば、「神の御崇（おほんたたり）」とのみ言ふに、2 さるべきこともなし。いかなることにかと、怖れたまひける夢に見えたまひけるやう、いみじう気高きさましたる翁のおはして、「この日の荒れて、日頃ここに a 経たまふは、己がしはべることなり。3 よろづの社に額の掛かりたるに、己がもとにしもなきが悪しければ、掛けむと b 思ふに、（注4）なべての手して書かせむがわろくはべれば、4 汝に書かせたてまつらむと思ふにより、5 この折ならではいつかはとて、とどめたてまつりたるなり」とのたまふに、「たれとか申す」と問ひ申したまへば、「この浦の三島にはべる翁なり」とのたまふに、夢のうちにもいみじうかしこまり申すと c 思すに、おどろきたまひて、また（注5）さらにもいはず。

（『大鏡』より）

［注］1　佐理の大弐――人名。「大弐」は大宰大弐という地方官の官職名。佐理は書道の名人として有名だった。
2　泊まり――港。伊予国は現在の愛媛県。
3　もの問ひたまへば――占いをして（悪天候の理由を）尋ねなさると。
4　なべての――普通の。
5　さらにもいはず――（その後のことは）言うまでもない。この後、佐理は額を書いて奉納し、無事に帰京した。

問一　二重傍線部「たまひけるやう」を現代仮名遣いに書き改めなさい。

問二　波線部a「経」・b「思ふ」・c「思す」の動作主の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　a　佐理の大弐　b　佐理の大弐　c　三島の翁
イ　a　佐理の大弐　b　三島の翁　c　佐理の大弐
ウ　a　佐理の大弐　b　三島の翁　c　三島の翁
エ　a　三島の翁　b　三島の翁　c　佐理の大弐
オ　a　三島の翁　b　佐理の大弐　c　佐理の大弐

問三　傍線部3「よろづの」・5「この折」の解釈として最も適当なものを、次の語群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

3「よろづの」
ア　数種類の
イ　周辺の
ウ　全ての
エ　都の
オ　山々の

5「この折」
ア　この夢の中
イ　この悪天候
ウ　この時代
エ　この場所
オ　この機会

問四　傍線部1「いとあやしく思して」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　風が強く吹いているのに船が港から全く進まないから。
イ　何日も海が荒れ続け片時も出航できるようにならないから。
ウ　海が荒れている日にばかり出発しようとするから。
エ　伊予の国に着いたちょうどその日に海が荒れたから。
オ　出航しようとすると再び海が荒れる日々が続いたから。

問五　傍線部2「さるべきこともなし」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　神に崇(たた)られるようなことは身に覚えがないということ。
イ　神を崇るようなまねをするはずがないということ。
ウ　占いの結果など気にしてはならないということ。
エ　神の怒りをなだめる方法が全くわからないということ。
オ　占いで嵐を鎮めることは出来ないことではないということ。

問六　傍線部４「汝に書かせたてまつらむと思ふ」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　他の神社にはすでに額があるので、同じ事をするのは当たり前でつまらないと考えたから。

イ　他の神社の真似をしているようで良くないから額を掛けなかったのは、間違いだと考えたから。

ウ　他の神社と同じように額を掛けたいが、ありふれた字ではよくないと考えたから。

エ　他の神社に奉納したように、自分の神社にも佐理が額を納めるのが当然だと考えたから。

オ　他の神社にはないような額を掛けるには、ありふれた手段ではかなわないと考えたから。

二〇二〇年度　入学試験　国語　解答用紙

早稲田大学系属　早稲田渋谷シンガポール校

※文字は、〔丁寧に・濃く・大きく〕書きなさい。

受験番号						

氏名

得点

一

問一　a　b　c　d　e

問二

問三

問四

問五

問六

二

問一　a　b

問二

問三

問四

問五

問六

三

問一

問二

問三　3　5

問四

問五

問六